

第2回日本痴呆ケア学会

痴呆性高齢者へのイメージ変化について学生の視点から 痴呆介護の学習を考える

加藤広美, 中西遍彦, 伊藤利美, 岩田フミ子, 川村陽一

四日市福祉専門学校

【はじめに】

介護福祉士養成における介護施設実習の果たす割合は高い。しかし、その実習において、介護を目指しながらも、痴呆性高齢者が怖い等と、苦手意識を持ち、かかわりを上手く持てずに悩む学生も少なくない。その反面、怖いイメージがあったが全然怖いことはなく、楽しかった、という学生も見受けられる。

学生の持つイメージは、実習において痴呆性高齢者とかかわりを持つ中で修正され、解消され、そして、よりよいケアの担い手と育成される、と考えられる。

そこで、各実習段階における学生の持つ痴呆高齢者に対するイメージ、及びイメージの変化を調べ、これからの痴呆介護の学習がどう生かされるか考えてみたい。

【調査方法】

1. 対象

本学介護福祉学科43名(平成12年度入学)

2. 調査時期

平成12年10月5日(第1段階実習前)、
平成13年9月7日(第3段階実習前)

3. 調査方法

介護施設実習第1段階前、第3段階実習前に、「痴呆性高齢者に対するイメージ」について、自由記述の方法をとった。

【結果】

I イメージについて:「話しにくそう」、「何回も同じ事を言っていそう」、「コミュニケーションがとりにくそう」、というコミュニケーションについての表現が文中に含まれたもの12名。「怖い」という表現7名。

II イメージの変化:第1段階前から3段階実習

前までに、イメージがプラス志向へと変化があったものの13名、変化が見られなかったものが25名、そのうち第1段階前からプラス志向が2名、他の23名においては第3段階にいたってもマイナス志向であった。

III イメージの変化に何らかの関わりがないかと考え、①高齢者との接触環境、②痴呆に関する知識、③第2段階実習の総合評価、④介護実習形態(a. ケース受け持ち制、b. フロア単位機能別)と、前記の各項目について、調査した結果、①②③④aについてはほとんど関連が見られなかったが、④bについて、実習件数(実人員)の多寡において関連がみられた。

【考察】

学生が特に問題にしているのは、話がわかるか、接しやすいかという点が大きい。実習前にコミュニケーションのとりにやすさに言及していない者の中にも、実習後のイメージ調査に、「思ったより話しやすかった」という記述が見受けられることから裏付けられる。

学生のプラスイメージ、マイナスイメージに分かれるのは、痴呆性高齢者の理解が可能かどうかにかかり、ひいては、コミュニケーションが取れるかどうか大きいと考えられる。

イメージの変容は、この調査から知識や環境にはほとんど影響されず、1人の痴呆性高齢者の担当者となって理解を深めるよりも、痴呆性高齢者に数多く接する中でマイナスイメージがプラスイメージへと変化していくものと考えられる。

【おわりに】

以上、考察を踏まえて、学生が痴呆性高齢者に対しより深い理解が得られるように痴呆ケアの教育のあり方を考えていきたい。